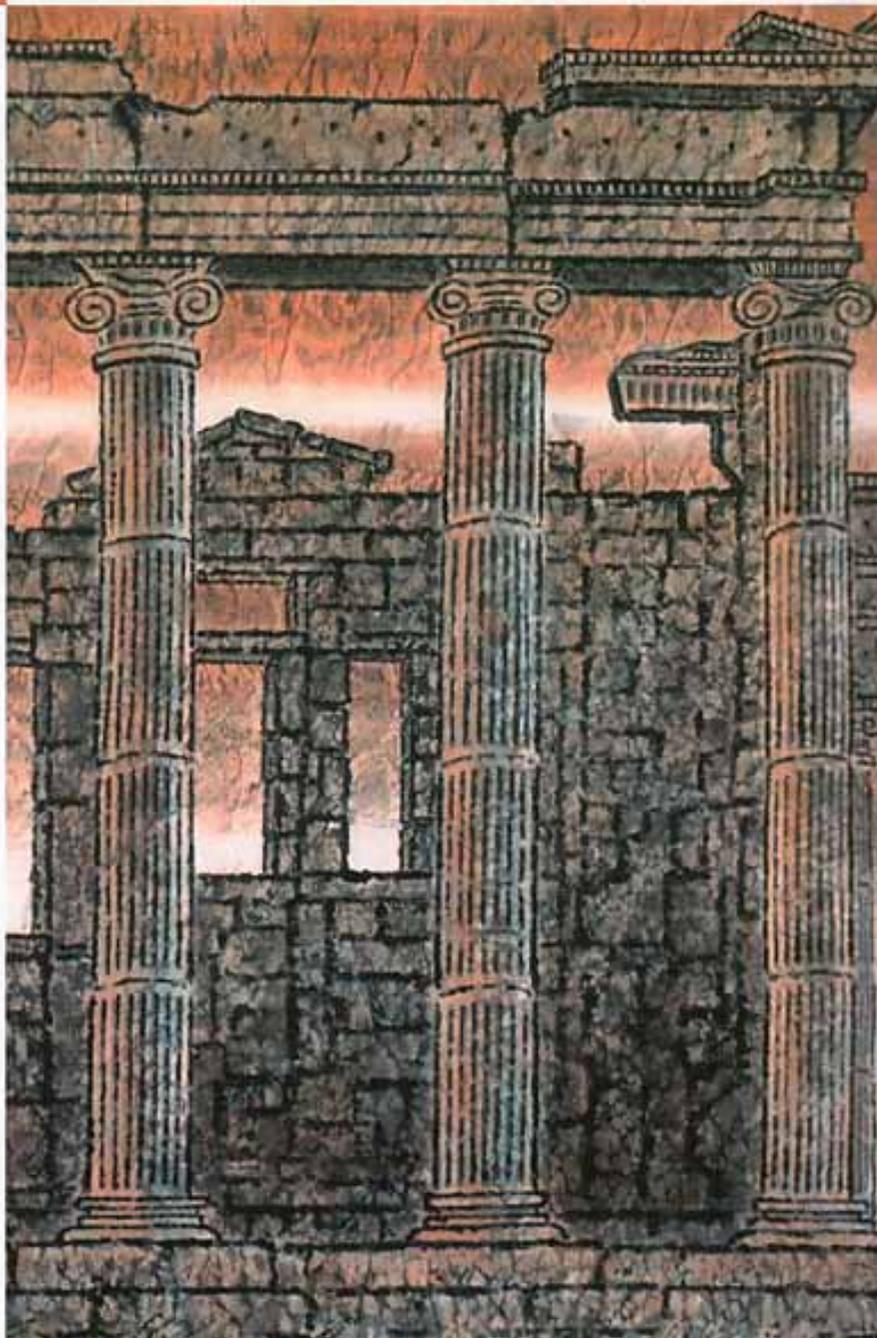


沖

11
2020

休刊雑誌【おき】



洗ひ筆

能村 研三

見ずして逝けり

大冊三百六十頁に及ぶ五十周年記念号が出来上がった。ゲラの段階では校正紙は見えていたものの、実際には手にするといささかの興奮を覚えた。編集長をはじめ発行に携わった方々のご苦勞に心より感謝したい。

中でも「沖の源流」の企画は五十年の歴史の中で多くの沖人の人となりで蘇ってくるので読んでいても楽しかった。

もう一つの企画で現在の沖人による「私の大切な一句」には同人、会員が多く参加して下さった。

コロナ禍により句会等で多くの人との触れ合いが出来ない中、時間の経つのが早く感じられたが、この半年の間に、佐藤みほさん、菅谷たけしさん、熊倉松太さん、秋葉雅治さん、浅野吉弘さん、洲上千津さん、梅村すみをさんの七名の同人の方が亡くなりました。

次の四名の方からは「私の大切な一句」にも原稿を寄せていただいたが、掲載紙を見ることなく亡くなられてしまった。

まつすぐに立たせて洗ふ聖夜の子

菅谷たけし
菅谷たけしさんは、五年前の

月光にくまなく晒す洗ひ筆

星月夜汀の砂の固緊まり

荒海の抜き身光りの秋刀魚買ふ

一茎のひとくねりして貴船菊

畏き夜の二尺四方の居職の場

無聊の夜机辺の胡桃艶を増す

筆立てにささりしままの秋扇

板の間に蹠親しき今日の月

秋爆の白き音色を奏しけり

露の玉はしる力を葉にためて

四十五周年記念事業では実行委員長として細部にわたりてご尽力下さり、五十周年へ向けての布石を築いていただいた。
北回歸線近き地ときにさへら藝

秋葉 雅治

秋葉雅治さんは、一時大手百貨店の美術部におられたので芸術文化に對しての造詣が深く、句会で批評も的確で私たちも勉強になった。

あふれ出す越の雪代つむぎ機

洲上 千津

「沖」創刊立志八十八人のお一人で、私は十代の頃からお目にかかり、登四郎が地方に出かける時は一番の側近としてご一緒して下さいました。

いのちとはかくもしつかや冬ざくら

梅村すみを

梅村すみをさんは山口県におられて、福岡、山口地区で玄界支部を立ち上げられ支部活動に尽力された。東京赴任時代では多くの句会でご一緒させて頂いた。

皆さんにそれぞれたくさんの思い出がある。五十周年を前に旅立たれてしまったのは残念でならない。心よりご冥福をお祈り申し上げたい。

合掌

能村 研三

虫の闇

森岡 正作

父母の忌の遠くなりけり雁渡し
見得切つてゐる円熟の石榴かな
昼ちちろ鳴かせて蔵の喫茶店
背後には鬼もゐるべし虫の闇
追伸のやうに小鳥の遅れくる
年寄りの日や快晴といふ御負け
果てもなく引きをり貧乏かづらかな

曼珠沙華

登四郎先生は曼珠沙華の句を多く詠んでいる。その中で沖の人々に浮かんで来るのは、当然〈曼珠沙華天のかぎりを青充たす〉である。沖創刊の決意を込めた句であり、曼珠沙華の赤と天の青との強烈なコントラストに、血を滾らせる先生の充実度が感じられる。

今、わが家の田圃の畦には曼珠沙華が整然と咲いている。周囲も区画整理をされているので、花が一枚一枚の田を画するようで見事である。登四郎先生のもう一句へ曼珠沙華「火が飛んで萱原に」の「火が飛んで」はまさに野の景であり、曼珠沙華の咲く様子を活写している。散歩していて曼珠沙華の一叢を見ては、どうしてこんな所にといつも思うのである。

また畦に曼珠沙華はよく合うのであるが、土竜を退散させる効果もあるとされている。



能村 研三

いつか止む残暑いつ已む疫禍かな 遠城 健司
今年の夏は感染対策と熱中症対策に追われ、日本中のだれもがコロナが一日も早く治まるように願ひ、また厳しい残暑が治まるように願った。遠城さんの句、我慢が続く中にその願ひを詠んだ。「いつか止む」「いつ已む」と繰り返しの表現を使い、願ひの深さがうかがえた。特に「已む」はそれまで続いていたことが、切れて続かなくなることで、特にコロナ疫禍の終息へ向けての思いは強い。

芋の露じやれあふやうに太りけり 小倉 征子
芋の露は、七夕の朝その露を集めて墨をすり、短冊に願ひを書くと美しい文字が書けるようになるという故事がある。有名な句では飯田蛇笏の〈芋の露連山影を正しうす〉がある。つややかな里芋の葉に大粒の露がころんと転がり、まるで芋の葉の上でじやれあっているようであった。露の句というが大抵優さを詠むが、この句は明るくて楽しい。

自然死てふ贅沢もあり秋螢 中村 重幸

一人の人間が死に至るまでには、さまざまな病に遭遇し、それを克服していかなければならない。天寿を全うしての自然死はある意味では幸せで贅沢なのである。秋風が吹く頃に飛ぶ螢は弱々しく放つ光に優さを感じるが、そんな秋の螢に倣い死んでいける贅沢を思い描いた。

石塊は流人の墓標 曼珠沙華 宮岡 弘

江戸時代の流人の島、その暮らしぶりも大変であったようである。死んでからもきちっと墓石を建てることは許されず、埋葬された地の上には墓標となる石塊が置かれた。その魂を慰めるかのように曼珠沙華がきれいな花を咲かせた。

黒葡萄 闇 澁へたり 深めたり 小坂 尚子

一粒の葡萄を、一つ一つ噛み締め、自然のありがたみを感じた。作者は眼前の黒葡萄を凝視した。この皮の黒さはきつと闇を湛え、闇を深める色に違いないという思いに至ったのだ。

床板の木目 足裏に 処暑の寺 宮下 桂子

木の家はその肌触りや風合い、香りが魅力であるが、処暑の頃になると、足裏に感じる床板の木目はべたつくことなく、裸足でもさらりと快適に過ごすことが出来る。処暑の微妙な季節感を感じた一瞬であった。

頃合のよき 暮色かな 水を打つ 矢野美沙子

打ち水の頃合というと、日中の太陽がきらきらしている時よりも日が暮れかかった夕方が好ましい。西の空の暮色をめながら灼熱の地に水を打って冷ました。

蒼茫集



桐一葉

甲州千草

源流

辻美奈子

引き合うて共に秋めく蔓となる
* パツキンを換へし蛇口の水は秋
子は弾むものなり蝗休まらず
偶数の頁は裏よ桐一葉
競馬場行きの裏道郁子熟るる
新刊の匂ひごと買ふ良夜かな

蟬落ちし土悉く乾きをり
廃駅に石炭の貨車夏終る
源流の色なき秋の泉かな
* マザーツリー月光太く届きたる
星月夜シート波打たせて広ぐ
包まれてみむ秋繭の淡さなら

秋

七種年男

群肝

千田百里

稲妻に裏と表のありにけり
秋灯のいろのそれぞれ瀬戸の島
騙し絵に潜む女や秋の声
ナフタリン匂ふ背広や秋の風
朝顔や四股踏む響き井筒部屋
* 東京は乾いた生簀鱚雲

爪先に秋の来てぬし西鶴忌
* 籠り居の矜持や後の更衣
灯しても矢つ張りふたり夜の長き
群肝の十日の菊のころかな
髪切らる鋏の律の調べかな
我にまだ残照あらば青蜜柑

大花野

小野寿子

* 芒原こころ奪はるとき恐し
人はみなひとりぼつちよ大花野
秋暑しねぐらの鳥の騒ぎやう
自然遺産の山々低し鱚雲
此々に来て人に甘へし赤あかね
修験者に険しき径や雲の峰

祝ひ唄

栗原公子

蜻蛉を抓むや翅に紙の音
風は秋まだ濡れてゐる草木染
暗渠よりせせらぎ聴こゆ星月夜
* 寂しさやなべて色濃き盆のもの
炊立てを仏と分かっ今年米
新走り老いし杜氏の祝ひ唄

不一致

菊地光子

花木榿けふに忘るる今日の悔い
* 性格の不一致といふ暑さかな

野菊咲く岸へ渡船の舳光かな
大岩に裾を濡らして水澄めり
指先に香りうつして青山椒
秋うららイルカのショーの水しぶき

あかね雲

高木嘉久

* 残る蝉全て招きし大樹かな
銅像はネクタイ確と秋暑し
鱚雲けふは下町最辰かな
あかね雲帰燕見送りさらに濃し
タワーマンション無縁の街の大き月
江ノ電が江ノ電を待ち暮の秋

ハーモニカ

能美昌二郎

七夕の夢の重さに撓る竹
夕菅や厩舎に帰る蹄音
花火果て冷めゆく空に残る月
秋立つや篠笛の吐く風の色
黙禱にいつせいに鳴く法師蟬
* 新涼や口にひんやりハーモニカ

潮鳴集



コンパス 石田 静

*コンパスの銀の軸立秋立てり
手掴みでくれしポプコーン鱗雲
鳳仙花爆ぜて試験の時間切れ
交番の留守を預かる赤まんま
無花果や解体新書にアダム・イヴ

水のかたち 兵藤 恵

*白桃の水のかたちを毀しけり
てのひらの舟に味見の新小豆
かなかなの空いつばいの淋しき日
蜻蛉の群れギャロップの砂埃
おとうとを花野に残し泣かせたる

国 原 栗坪和子

*武蔵野は風の国原赤蜻蛉
鳴き了へて蟬の魂魄のこりけり
今朝秋の良寛手鞠まろびたり
夕焼けて醤油の匂ふ船厨
汗の夫の最終講義受けにゆく

大昼寝 村上葉子

蚊を打ちし音の響きてひとりなる
*もつともつと熱が欲しいと赤カンナ
干されあるシーツはためく終戦日
油照り歩く私は鯉呼吸
たましひを身から放ちて大昼寝

天 眼鏡 森村江風

銀漢の底の漆黒原生林
秋暑し鳶の搔つ込む深川井
灯台は別れのシャンツェ秋燕
外つ国の銀貨黒ずみ九月尽
*灯火親しルビへすり寄る天眼鏡

ソーシャルディスタンス 小河原清江

*向日葵のぞくぞく咲くやある愁訴
朝顔や昔上総の藍紋り
秋潮の香に咽せびをり夜の浜辺
星会ふ夜地上はソーシャルディスタンス
夢のははと至福の刻を星流れ

全 方位 小田里己

しろじろと島の岩肌今朝の秋
角揺すり山神のごと鹿立てる
母の手のゆるゆる動く盆仕度
見栄つばりかも意地つばりかも葉鶏頭
*全方位水平線や秋の航

菊 師 木村あさ子

荒潮にけふる岬や大花野
雨来るか星なき夜のちちろ虫
白神はカヌーの聖地水澄めり
*人形の命あづかる菊師かな
伸びらかな振り売りの声秋澄めり

安全帽 諸岡和子

野分過ぐ空の芯まで青くして
かなかなの均す心の波動かな
*まんじゆさげ風の神輿を担ぐかに
芋煮鍋据ゑる重機の安全帽
露草の無心の空の青に咲く

笙の音 道端 齊

大鯛の手応へ来たり星月夜
水平を刻む灯台星月夜
*外寝して星にならずに目覚めたり
最終の客は秋風ボストン便
秋風の奥に途切れし笙の音

沖作品



能村研三選

道灼くる足を運ぶ身もるともに

埼玉

遠城 健司

* いつか止む残暑いつ已む疫禍かな
新涼や吹けば風筋水のごと

耳にせし家路これより虫の秋
秋の田や糸くぼの如きつむじ跡
つづれさせ居職の膝を崩しけり
桔梗に適ふ古刹の通り雨

福岡

小倉 征子

* 芋の露じやれあふやうに太りけり

七曜もすでにうやむや木槿咲く
上げ潮の音を五体に台風来

千葉

中村 重幸

* 自然死てふ贅沢もあり秋螢
かなかなや戒名のなき流人墓地
天の川真下を船の最終便
新涼や箸置として河の石

弦や襲くるぐると裏比叡
音立てて弾くる梁や秋早

神奈川

宮岡 弘

* 石塊は流人の墓標曼殊沙華

たかだかと上がる跳ね橋秋日和
湯葉の香の満ちて祇園の良夜かな
山幾重一足飛びに秋の虹

小坂 尚子

校庭の深閑としてカンナ燃ゆ
みちのくの女郎花なりたくましき

* 黒葡萄闇湛へたり深めたり

討入りの後ろに侍る菊師かな
今朝の秋からくり箱のかたと開き
盆提灯ともして淡き絵柄かな

市川市

宮下 桂子

落ち蟬のつつけばじじと底力
床板の木目足裏に処暑の寺

* 大楠の幹の空洞秋の声

梅花藻のゆらぎのなかに小さき魚

いつせいに鳴き始む蟬いのち燃ゆ
朝顔の紫紺にうまる籬かな

矢野美沙子

* 頃合のよき暮色かな水を打つ
朝日うけ梨もぐ腕黒光り

千葉

鈴木 和江

門火焚く見覚えの杖そのままに
本堂の闇に闇ありちちろ鳴く

住み古りて両手に余る萩括る

海原の波の秀蒼む稲光
コンバインどつと吐き出す陽の匂

神奈川

加賀 莊介

* 初茄子の笑ひ上手を洗ひけり
灼くる日の鉄縫れあふ操車場

単車駆る背に紅緒のをどり笠
踊見の手がをどりをり車椅子

夏果ての星の砂入るガラス壘

物干しの満艦飾や梅雨明くる
虹の環をくぐつてきたるモノレール

埼玉

浜田はるみ

* 風鈴や風のつながる路地暮し
日輪を捉へ蜘蛛の囀の風輪
はんざぎの身じろぎもせず石の貌

ちゆら海の蒼より青き牽牛花

千葉

里村 梨邨

* 銀翼を吸ひ込む空の秋めける

夕まぐれひたひた灯る海施餓鬼
たまゆらの灯火消えて後の月
捨て畑にのこる微熱の唐辛子

青森

工藤 邦子

* 石切場ものみな揺らぐ炎暑かな

果てしなく続く風紋雲の峰
諍ひて飛び出す我を夕立打つ
夏草や夕日まみれの忠魂碑

千葉

浜崎喜美子

* 吹割のしづく水合ひ法師蟬

道すがら梨の挽ぎたて買ひにけり
露けしや惜しまれつつも店仕舞ひ
若棋士の寄せくる一手新松子

牛島 晃江

* 潮騒は永遠のリズムよ秋気満つ

寄せ返す波に濡れゆく秋思の歩
秋澄めり沖つ白波磯砕く
引潮の風紋残す爽やかさ
野分潮海鳴り遠くうねり来る